



鳥山みわさん



小林円加さん



新美帆乃香さん

継続した図書館教育が実を結び 読書感想文で喜びの受賞

図書館の幅広い蔵書が魅力 本に親しむ機会が感性を育む

中学校、高校では6年制一貫教育の一つとして図書館教育に力を入れてきました。具体的には年に1回のホームルーム読書会や春と秋の読書週間を設け、生徒たちが本に親しむ機会を増やしています。このプログラムは6年間通して行われます。中学校では読書が苦手な生徒でも、少なくとも年に10冊以上の本を読むこととなります。感想文を書くことを通して読解力や自分の考えをまとめる力を養うことができます。また読書を習慣にすることで、内容を分析し視野を広げるといった能力も伸ばしてくれます。さらに図書館には各教科の推薦図書も展示。図書常任委員会が選ぶ新書も年々増加し、中学の蔵書は約8万5000冊、高校では約9万7000冊を誇ります。

こうした図書館教育が実を結び、2009年度「第55回青少年読書感想文全国コンクール」で現在高校3年生の鳥山みわさんと小林円加さんが見事、愛知県知事賞を受賞。全国コンクールで、鳥山さんは内閣総理大臣賞に、小林さんは入選に輝きました。内閣総理大臣賞の受賞は2006年の

水野綾子さんに続いて2度目の快挙です。鳥山さんが課題図書の中から選んだ一冊は中牧弘允著の「カレンダーから世界を見る」。あらすじを読んで「他の本よりも内容が興味深い」と思い、この本に決めたと話す鳥山さん。「カレンダーを通して世界観を見るという内容に感動し、また世界各国の変わったカレンダーの写真も印象に残った」そうです。一方の小林さんは2008年度も愛知県知事賞を受賞。2009年度は旧ソ連時代の強制収容所(ラーゲル)での主人公のある一日を克明に描いた「イワン・デニーソヴィチの一日」を選びました。「父がショスタコーヴィチの曲をいつも聴いていることから自然とロシアに興味が変わり、この本を選びました。どんなにつらく厳しい仕事でも楽しんでやろうという主人公の生き方に感銘を受けました。」と小林さん。自分自身の考えととても共感できる部分が多かったそうです。

また現在高校1年生の新美帆乃香さんも昨年12月に「第55回名古屋市読書感想文」で優秀賞を受賞しまし

た。作品は「私が戦争のある村で生まれたら～『ぼくは13歳職業、兵士』を読んで～」新美さんは普段から社会問題に強い関心があり、今回も少年兵士が主役の本を題材に、単に感想にとどまらない自分の思いを、見事な論理構成と表現力によってひとつの作品に仕上げました。中学校、高校の豊かで充実した図書館教育のもとで、今後もこうした生徒たちが増え続けていくことが期待されます。

カレンダーから世界を見る

鳥山 みわ

私の部屋には、紙のカレンダーがない。それがいつからだったかはわからないが、少なくとも小学校くらいまでは、カラフルに彩られた楽しいカレンダーが、壁やら本棚の横やらに掛かってたように思う。だが今は、電池さえ交換してやればいつまでも時を刻み続けるデジタルカレンダーと、編目状のカバーをずらすだけで永遠に「新しい月」を迎え続けることができるアルミ製の万年カレンダーが、机の上に置いてあるだけだ。

それで不便だったことは一度もなかった。まして、「無機質で寂しい」などは少しも思わなかった。無駄なゴミも出ないし、合理的で良いじゃないかとさえ思っていた。

この本を読んで、その考え方はがらりと変わった。カレンダーってすごい、と心から思った。今までカレンダーをないがしろにしていた自分は、なんてもったいない時間の過ごし方をしていたのだろうと、悔やんだほどだ。

世界には様々なカレンダー、つまり暦が存在するというのを、私達は知っている。だが、実際に私達を使用している西暦以外の暦を見たことがあるという人は、かなり少ないのではないだろうか。この本で初めて西暦以外の暦を見た私は、愕然とした。見たこともない月の名前がある物や、年号の所に「5766」年と書いてある物。数字らしきものがまったく見られず、絵だけで一日一日を表している物。さらには、見方すらよくわからない物。それらはすべて同じ時間を表しているはずなのに、まったく違うものに見えた。

そう思った時、「私は普段、西暦という窓を通して時間を見ているんだ」ということに気付いた。そしてもちろん、その窓が違えば、

違う時間が見えてくる。違う暦を見れば、その暦を使っている人々の時間をのぞき見ることができるのだ。

暦の違いは文明の違い。他の暦に接することは、他の文明を知ることにつながるということを、この本は教えてくれた。だとしたらカレンダーは、物凄い破格の値段で世界旅行に行ける夢のチケットである。

カレンダーは、私達の日常にも新たな切り口を作ってくれる。私達は季節の移ろいを、日付はもちろんだが、草花や虫、風において、太陽や月の様子から感じ取る。しかし私達現代人は、そういった時の流れに対するアンテナの感度が、かなり鈍ってきているのではないだろうか。幼い時は沢山外で遊んで季節を肌で感じていても、成長し、そんな事に気をまわせなくなれば、その感触も薄れてしまう。

暦は、物によって様々だが、月齢や、その月の草花が書いてある物も少なくない。毎日日付をチェックする中で、ああ、そういえば今日は満月か、もうそろそろあの花が咲くころだな、と知ることができれば、もうその日はただの「日付」ではなくなる。その日だけが持つ色の付いた、かけがえのない時間となるのだ。

当然のことながら、私達が過ごす毎日、一日として同じ日はない。それどころか、一分、一秒たりとも同じ時間は存在しない。それでも私達は、同じような日ばかりが続いているように感じたりする。出来事として特別な事がなければ、その一日は私達の記憶の中で「意味がなかった日」のフォルダにしまわれてしまう。そんな哀しい運命

をたどる時間に、カレンダーは色を付けてくれる。現代の喧噪にもまれ、一日一日が特別であるということを忘れがちな私達の代りに、そっと小さなフラッグを立ててくれる。

もちろんそのフラッグも、暦によって違う。その良い例として、この本では祝日が挙げられている。祝日は、その国の歴史的なものや宗教的なものに基づいてつくられる。つまり、祝日自体が、その国や地域の歩みを表しているのだ。それは、よそ者がその国の背景を知るだけでなく、その暦を使用している人々が自分の住む地域をより深く理解する上でも重要な役割を果たしている。「自国のことを自分達がよく知らない」という状況が危ぶまれ、自国の文化への理解と知識が求められる今こそ、カレンダーから学ぶべきことは多いのではないだろうか。

私達は、ものを見たり、判断する時、どうしても狭い窓から見てしまう。狭い窓から見る所為で起きてしまう諍いも少なくない。それは、世界という舞台でも同じことだ。

自分達のものさしを捨て、寛大な心で物事を見つめるというのは、そう簡単なことではない。だが、相手の立場を少しでも理解し、相手の視点を経験してみるだけで、両者の距離はぐっと短くなる。カレンダーは、そんな窓として、私達を他の文化に触れさせてくれ、そして自分達の文化に気付かせてくれる。日々を豊かにしてくれる窓なのだ。

違った窓の向こうでは、今日も、今この一瞬も、違う時間が流れている。

そう思うと、今自分が過ごしているこの時間が、とても愛おしい物に感じた。